

# 衡平性の認知とデートDVとの関連

赤澤 淳子<sup>\*</sup>・井ノ崎 敦子<sup>\*\*</sup>・上野 淳子<sup>\*\*\*</sup>・松並 知子<sup>\*\*\*\*</sup>・青野 篤子<sup>\*\*\*\*\*</sup>

仁愛大学人間学部<sup>\*</sup>・徳島大学学生支援センター<sup>\*\*</sup>・四天王寺大学人文社会学部<sup>\*\*\*</sup>

神戸女学院大学人間科学部<sup>\*\*\*\*</sup>・福山大学人間文化学部<sup>\*\*\*\*\*</sup>

## Perceptions of Equity and Dating Violence

Junko AKAZAWA<sup>\*</sup>・Atsuko INOSAKI<sup>\*\*</sup>・Junko UENO<sup>\*\*\*</sup>

Tomoko MATSUNAMI<sup>\*\*\*\*</sup>・Atsuko AONO<sup>\*\*\*\*\*</sup>

<sup>\*</sup>Jin-ai Univ.・<sup>\*\*</sup>Tokushima Univ.・<sup>\*\*\*</sup>Shitennoji Univ. International Buddhist Uni

<sup>\*\*\*\*</sup>Kobe College・<sup>\*\*\*\*\*</sup>Fukuyama Univ.

本研究では、デートDVを当事者間の親密性や関係性などの関係的変数から検討することを目的とした。具体的には、衡平性の認知による、恋愛スタイルやデートDV被害・加害経験の差異、また、衡平性に関する各変数および恋愛スタイルが、デートDVの被害加害経験に及ぼす影響について分析した。調査への参加者は、大学および短期大学の学生329名であった。分析の結果、過小利得者は、衡平利得者や過大利得者より関係満足度が低かった。また、過小利得者では、パートナーとの関係性に没頭する狂気的な愛のスタイルや、パートナーとの間に距離を保とうとする遊び半分のゲーム感覚的な愛のスタイルという対称的な感情が高いという特徴が示され、アンビバレントな感情をパートナーに対して抱きやすいことが示唆された。さらに、自己投入がManiaを経由して、DV被害加害経験を生起させることが明らかとなった。つまり、関係のアンバランスさが、嫉妬、不安、抑うつのような強い感情を高め、デートDVの加害・被害を引き起こしている可能性が示唆された。

キーワード：デートDV、衡平性、恋愛スタイル

## I. 問題と目的

ドメスティック・バイオレンス（domestic violence：DV）とは、直訳すると「家庭内暴力」であるが、一般的に使われるDVとは配偶者や恋人など「親密な関係」にあるパートナーからの暴力を指し、女性が男性から被害を受けるのがほとんどである（井村，2006）。DVが夫婦間などの親密な関係での深刻な暴力としてイメージされるようになったのは、ここ20年のことであり、DVの調査報告が活発化する中で、男性から女性への暴力だけではなく、女性から男性への暴力も存在することが明らかになった（富安・鈴井，2008）。ここでいう暴力というのは、殴る、蹴るなど

の身体的なものに限らず、相手に恐怖感を与えるなどの精神的暴力、望まない性行為を強要するという性暴力、生活費をわたさないなどの経済的暴力も含まれる。日本においても、DVが深刻な社会問題となってきたおり、2001年に「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律（DV防止法）」が制定され、法律上、配偶者からの暴力は「DV」と定義された。

DVは、夫婦という同じ家に暮らす男女だけに起きるものではなく、青年期のカップルにも生じる可能性があり、青年期のカップルにおける暴力は、「デートDV」と呼ばれている（小泉・吉武，2008）。デートDVの暴力の種類はDVと共通しているが、デートDVはDVより概念としての定着も遅く、先行研究も

少ない(藤田・米澤, 2009)。また, デートDVにおける関係性は, 当事者にとっても周りからみても流動的であり, 夫婦間暴力よりもいっそう見えにくく, 法律による保護や救済の対象となりにくいため, 暴力が潜在しやすい(青野ら, 印刷中)。さらに, 恋愛感情を理由に束縛や制限や強制などが正当化されたり(「好きだから~をするな, ~をしろ」), 親密な関係であるがゆえに暴力が合理化されたり(「好きだから, つい手をあげてしまった」「私が何とかしてあげたい」), 加害側と被害側の双方に認知の歪みが生じやすいという特徴がある(野坂, 2010)。

内閣府(2009)によると, デートDVの実態については, 10歳代から20歳代の頃の交際相手から, 「身体的暴行」「心理的攻撃」「性的強要」のいずれかをされたことがあったという人は女性13.6%, 男性4.3%であることが明らかになっている。また, 横浜市 of 若年層におけるデートDVの実態調査では, 高校生, 大学生では女性の4人に1人の割合でデートDV被害を受け, 交際しているカップルの3組に1組の割合でデートDVが起こっていることが指摘されている(藤田・米澤, 2009)。そして, 先の内閣府による調査では, 配偶者からのDVにおいて, 交際中から被害に遭っていた割合が, 女性6.4%, 男性5.8%となっている。つまり, デートDVは, 現代青年にとって非常に身近なところで起きている。しかも, デートDVが, DVの予備軍となっている可能性も高いことを考えると, デートDVの実態や要因について検討することの意義は大きいと考えられる。

これまでDVやデートDVに関する心理学的研究は米国を中心に進められてきた。それらの研究は, ①被害者・加害者のパーソナリティ特性, 性別役割態度, 性差別主義的態度といった個人変数, および②当事者間の親密性や関係性などの関係的変数から検討されている。しかし, ①に比して②の研究はまだ少ないのが現状である。関係的変数からの検討から, パートナーに対する不満が強いほど暴力性が高まること(Bookwala, Frieze, & Grote, 1994), 関係が長く持続するほど攻撃レベルが高まること(Sugarman & Hotaling, 1989)などが明らかにされている。我が国においても, 女性の身体的暴力の被害や男性のつ

きあいチェックの被害が, 性交渉のあるカップルで多くなることが示されている(土田, 2007)。デートDVは相互的なものだという研究結果もあることから(Hines & Saudino, 2003), 今後は自身とパートナーとの相互のやりとりを分析する必要がある。

そのような親密な対人関係における相互作用を報酬(Reward)と費用(Cost), 投入(Input)と成果(Outcome)という経済学的概念で説明するのが社会的交換理論である。社会的交換理論は, 親密な対人関係の形成過程や崩壊過程を説明する上で有効な理論とされている(奥田, 1997)。社会的交換という視点から, いくつかのモデルが考案されているが, それらに共通した枠組みは, 関係の安定性や満足度は, 投入や成果に依存することである。対人関係に関する社会的交換モデルの中では最古で最も知られたものが衡平理論である(Walster, Walster, & Traupmann, 1978)。提唱者のAdams(1965)は, 投入と成果の双方の衡平な関係が, 満足感を高め関係関与を深めると考える。Adamsは, 当事者の(不)衡平性の認知を以下のように定義している。

$OUTp / INPp > OUTo / INPo \rightarrow$ 過大利得状態

$OUTp / INPp = OUTo / INPo \rightarrow$ 衡平利得状態

$OUTp / INPp < OUTo / INPo \rightarrow$ 過小利得状態

(OUTp: 自己成果の認知, INPp: 自己投入の認知, OUTo: 他者成果の認知, INPo: 他者投入の認知)

ちなみに, 「衡平な状態」とは, 当事者同士が認知する投入/成果の比が等しい場合, すなわち $OUTp/INPp - OUTo/INPo = 0$ の場合である。この衡平理論から夫婦関係, 恋愛関係, 友人関係という親密な二者関係を検討した研究は数多い(赤澤, 2006; Davidson, 1984; Hatfield, Greenberger, Traupmann, & Lambert, 1982; 岩間, 1997; 諸井, 1990, 1994, 1996; 中村, 1990; Schafer & Keith, 1980; Traupmann, Petersen, Utne, & Hatfield, 1981; 和田・山口, 1999; Walster, Walster, & Traupmann, 1978)。Walster, Walster, & Traupmann(1978)が, Adamsの定義に修正を加えた公式を用い, 恋愛相手をもつ男女大学生を対象に衡

平モデルの検討を行っている。その結果、過小利得者では腹立たしさが、過大利得者では申し訳なさの感情が高まる傾向があることが報告されている。このような衡平モデルにおける過小利得者における腹立たしさや、過大利得者における申し訳なさのように、恋愛関係の中で生じる否定的感情が、パートナーへの加害行為やパートナーからの被害行為を誘発する可能性があるのではないだろうか。しかし、上記の研究は、一般的な恋愛関係や夫婦関係についての検討であり、デートDV等の不適応な関係性については検討されていない。

恋愛の関係性を自身の交際相手に対する感情的側面からとらえたのが恋愛スタイルである。Lee (1977) は、恋愛中の人々をインタビューして、恋愛には6つの異なるスタイル—Eros (美への愛)、Storge (友愛)、Mania (狂氣的な愛)、Agape (愛他的な愛)、Ludus (遊びの愛)、Pragma (実利的な愛)—があることを見いだした。Erosとは、強烈ではあるが、狂氣的ではなく、恋愛を至上のものと考えているという特徴をもつ。Storgeは、友愛とよばれ、穏やかな友情的な恋愛である。Maniaは、激しい感情を持ち、強迫的で、嫉妬深く、相手にのめりこむというスタイルである。Agapeは相手の利益だけを考え、自分自身を犠牲にすることをいとわない自己犠牲的な恋愛意識である。Ludusは、遊びの愛とよばれ、恋愛はゲームとみなされ、パートナーはそれぞれ相手に勝利しようとする。最後に、Pragmaは、自身の地位の上昇など、恋愛以外の目的を達成するために恋愛を手段としてとらえる実利的な愛である。Leeによると、これら6つのスタイルの位置関係にも重要な意味があるという (Figure 1)。6つの恋愛スタイルは環状に配されており、LudusとAgape、PragmaとEros、ManiaとStorgeは、それぞれ向かい合わせに位置している。そして、このような組み合わせはお互いのことが理解できないとされている。例えば、恋愛をゲームのようにとらえ、相手との距離をたもっておきたいLudus型にとっては、自己犠牲的に尽くしてくれるAgape型の恋人をうっとおしく重荷に感じてしまい、つきあっても楽しく感じられないというのである (松井, 1997)。

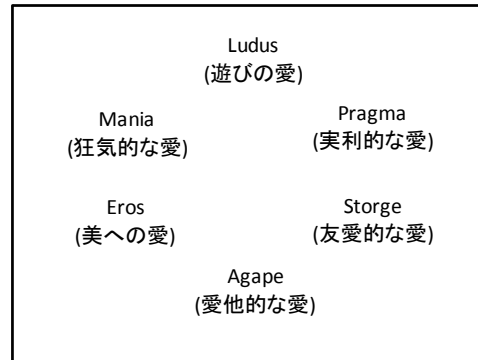


Figure 1 Leeの恋愛関係の類型論 (Lee, 1974より松井 (1997) が作成)。

このような恋愛スタイルも、デートDVの生起と関連している可能性がある。既にManiaについては、パートナーに対するManiaの得点が高いほど、暴力性が高いという研究結果が得られている (Bookwala, Frieze, & Grote, 1994)。そこで、本研究では、先行研究で関連が示されているManiaと、それ以外にAgape、Ludusを取り上げ、デートDV被害・加害との関連について検討したい。Agapeについては、相手のためには自己犠牲をいとわないというスタイルは、自身が暴力を受けても耐えるというDV被害者の心理と関連していると仮定した。また、Ludusについては、パートナーの存在をゲームのようにしか捉えられないというパートナーとの関係性を軽視する態度が、加害行為を引き起こしやすくなるのではないかと予測される。

そこで、本研究では、衡平性の認知により、恋愛スタイルやデートDV被害・加害経験にいかなる差異が示されるかについて検討することを第一の目的とする。また、カップルの関係性がデートDVの被害加害経験に及ぼす影響について検討することを第二の目的とする。具体的には、上記のような親密な二者関係の関係性を測定する衡平性に関する各変数および恋愛スタイル (Mania・Ludus・Agape) が、デートDVの被害加害経験に及ぼす影響について分析する。

## II. 方法

### 1. 調査参加者

中国地方、近畿地方、北陸地方に位置する4年制大

学および短期大学の学生329名（男性106名，女性223名）。年齢の分布は18~26歳であり，平均年齢は20.22歳であった。

## 2. 調査時期

2010年12月から2011年1月

## 3. 調査内容

### (1) 社会的交換尺度

中村(1991), 和田・山口(1999)による尺度を用いた。

#### ①自己投入尺度 (INPp)

これまでの付き合いにおいて，「自分が相手との関係にどの程度尽くしているか」について，「全く尽くしていない(1点)」から「非常に尽くしている(7点)」の7件法を用いた。

#### ②他者投入尺度 (INPo)

これまでの付き合いにおいて，「相手が自分に対してどの程度尽くしているか」について，「全く尽くしていない(1点)」から「非常に尽くしている(7点)」の7件法を用いた。

#### ③自己成果尺度 (OUTp)

これまでの付き合いにおいて，「自分がどの程度報われているか」について，「全く報われていない(1点)」から「非常に報われている(7点)」の7件法を用いた。

#### ④他者成果尺度 (OUTo)

これまでの付き合いにおいて，「相手がどの程度報われているか」について，「全く報われていない(1点)」から「非常に報われている(7点)」の7件法を用いた。

### (2) 恋愛スタイル

松井ら(1990)が，Leeの愛情類型の理論を基盤として作成したLETS-2の中から，Ludus(遊びの愛)，Agape(愛他的な愛)，Mania(狂氣的な愛)を各5項目，全15項目を採用した。調査では，「よく当てはまる(5点)」から「全く当てはまらない(1点)」の5件法で評定を求めた。

### (3) デートDV被害・加害経験の有無

大学生のデートDV被害・加害実態を調べるため，小泉・吉武(2006)が作成した尺度を用いた。質問

項目は各15項目であり，身体的暴力，精神的暴力，性的暴力を含む質問となっている。同調査では，回答方法は，はい(1点)・いいえ(2点)の2件法だったが，本研究では4件法を用いた(被害経験：いつも受けた(4点)，数回受けた(3点)，1回受けた(2点)，受けたことがない(1点)；加害経験：いつも行った(4点)，数回行った(3点)，1回行った(2点)，行ったことがない(1点))。なお，質問内容を考慮し，事前説明において「もし答えたくない場合には回答していただくなくても結構です」と口頭で説明し，被害・加害項目の質問文にも同内容を添えた。

### (4) 関係評価

中村(1991)による尺度を用いた。

#### ①関係満足感尺度

相手との関係にどの程度満足しているかについて7件法で尋ねた。

#### ②関係関与性尺度

相手との関係にどの程度深く関わっているのかについて7件法で評定を求めた。

## Ⅲ. 結 果

### 1. デートDV被害・加害経験尺度の因子分析

デートDV被害経験尺度15項目について因子分析(主因子法・Varimax回転)を行い3因子が抽出された(Table 1)。第1因子は，「腹を立てたとき，身体を掴んだり，叩かれたり，殴ったりされる」「腹を立てたとき，目の前でものを投げつけたり壊したりされる」「腹を立てたとき，大声で怒鳴られる」など6項目から構成されていたため，「身体的暴力・脅迫」と命名した。この因子についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ「冗談のつもりで，相手から軽く小突かれたり，蹴られたりする」の項目を削除した方が $\alpha$ 係数が高まるため分析では，5項目の合計得点を用いた。削除後は $\alpha = .732$ となった。第2因子は，「断っても，無理矢理，キスしたり，身体を触ったり，抱きついたりされる」「断っても，無理矢理セックスされる」「勝手に携帯の着信履歴や交友関係をチェックされる」など6項目から構成されていたため，「性的暴力・交友

Table 1 デートDV被害経験尺度因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
<b>身体的暴力・脅迫</b> $\alpha = .732$			
・腹を立てたとき、身体を掴んだり、叩かれたり、殴ったりされる	<b>.687</b>	.220	.142
・腹を立てたとき、目の前でものを投げつけたり壊したりされる	<b>.642</b>	.150	.193
・腹を立てたとき、大声で怒鳴られる	<b>.610</b>	.114	.194
・腹を立てたとき、殴るフリをされる	<b>.479</b>	.164	.120
・わざと嫌な呼び方で呼ばれたり、馬鹿にされたり、見下したような言い方をされる	<b>.367</b>	.284	.337
・冗談のつもりで、相手から軽く小突かれたり、蹴られたりする	.328	.166	.217
<b>性的暴力・交友監視</b> $\alpha = .743$			
・断っても、無理矢理、キスしたり、身体を触ったり、抱きついたりされる	.132	<b>.716</b>	.058
・断っても、無理矢理セックスされる	.107	<b>.677</b>	.091
・勝手に携帯の着信履歴や交友関係をチェックされる	.249	<b>.523</b>	.281
・コンドームを使用する避妊や性感染症予防に協力してくれない	.163	<b>.458</b>	.104
・行動を制限されたり、監視されたりする	.237	<b>.442</b>	.327
・嫌がっているのにポルノグラフィーを無理やり見せられたり、似たような行為を要求される	.163	.324	.174
<b>精神的暴力</b> $\alpha = .655$			
・腹を立てたとき、長い期間無視される	.164	.112	<b>.743</b>
・腹を立てたとき、すぐに別れ話を持ち出される	.166	.117	<b>.567</b>
・自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけられたり怒ったりされる	.299	.158	<b>.451</b>

監視」と命名した。この因子についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ「嫌がっているのにポルノグラフィーを無理矢理見せられたり、似たような行為を要求される」の項目を削除した方が $\alpha$ 係数が高まるため、分析では5項目の合計得点を用いた。削除後は $\alpha = .743$ となった。第3因子は、「腹を立てたとき、長い期間無視される」「腹を立てたとき、すぐに別れ話を持ち出される」「自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけられたり怒ったりされる」の3項目から構成されており、「精神的暴力」と命名した。 $\alpha = .655$ であった。デートDV加害経験尺度についても、被害尺度と同様の3因子を適用し、下位尺度化して以降の分析に用いた。なお、デートDV被害・加害経験の平均値、標準偏差、および得点範囲をTable 2に示した。いずれも平均値が低く、本研究への参加者においては、デートDVの被害を受けたことがない者や行ったことがない者の比率が高いと考えられる。

Table 2 各変数の平均値と標準偏差

平均値 (標準偏差)	得点範囲	最小	最大	得点範囲
衡平性に関する変数				
自己投入	4.59 (1.52)	1-7		1-7
他者投入	5.13 (1.49)	1-7		1-7
自己成果	5.03 (1.45)	1-7		1-7
他者成果	4.45 (1.51)	1-7		1-7
恋愛スタイル				
Mania	14.93 (4.72)	5-25		5-25
Agape	13.56 (4.56)	5-25		5-25
Ludus	13.57 (4.00)	5-24		5-25
関係評価				
関係満足感	5.10 (1.65)	1-7		1-7
関係関与性	5.05 (1.63)	1-7		1-7
被害経験				
身体的暴力・脅迫	8.24 (2.77)	6-22		6-24
性的暴力・交友監視	7.24 (2.39)	6-21		6-24
精神的暴力	3.93 (1.62)	3-11		3-12
加害経験				
身体的暴力・脅迫	8.27 (3.23)	6-24		6-24
性的暴力・交友監視	6.79 (2.07)	6-24		6-20
精神的暴力	4.28 (1.93)	3-12		3-12

Table 3 衡平性の認知と性別による各変数の検討結果

		男性 (N=106)			女性 (N=223)			F 値	性別	交互作用
		過小 (N=20)	衡平 (N=25)	過大 (N=61)	過小 (N=49)	衡平 (N=42)	過大 (N=132)			
恋愛スタイル	Mania	16.70 (4.33)	15.56 (4.82)	14.10 (4.80)	15.98 (3.98)	15.17 (4.40)	14.46 (4.98)	4.44*	0.16	0.35
	Agape	15.10 (3.85)	16.52 (4.71)	15.02 (5.42)	13.08 (4.42)	12.55 (3.68)	12.58 (4.09)	0.63	23.26***	0.89
	Ludus	12.25 (3.70)	12.60 (4.46)	13.44 (3.99)	13.20 (3.89)	12.83 (3.68)	14.38 (4.00)	3.15*	1.83	0.20
関係評価	関係満足感	3.65 (1.63)	5.24 (1.67)	5.51 (1.27)	4.24 (1.76)	5.43 (1.33)	5.33 (1.65)	19.49***	0.93	1.38
	関係関与性	4.00 (2.05)	5.40 (1.56)	5.08 (1.58)	5.02 (1.32)	5.17 (1.56)	5.11 (1.68)	3.84*	1.60	2.63+
被害経験	身体的暴力・脅迫	9.05 (3.78)	9.20 (4.30)	8.52 (2.80)	8.16 (2.32)	8.29 (2.63)	7.83 (2.37)	1.19	5.19*	0.05
	性的暴力・交友監視	7.65 (3.08)	8.00 (3.92)	7.30 (2.45)	7.43 (2.43)	7.10 (2.11)	7.00 (1.90)	0.96	2.23	0.43
	精神的暴力	4.45 (1.88)	4.16 (2.13)	4.34 (1.89)	4.24 (1.83)	3.64 (1.28)	3.59 (1.24)	1.46	5.42*	0.65
加害経験	身体的暴力・脅迫	8.75 (3.48)	8.28 (3.89)	8.82 (3.87)	7.53 (1.86)	8.07 (3.29)	8.27 (3.10)	0.50	2.37	0.38
	性的暴力・交友監視	8.35 (4.37)	7.24 (3.06)	7.05 (2.19)	6.65 (1.38)	6.69 (2.11)	6.43 (1.17)	2.99+	12.61***	1.68
	精神的暴力	4.10 (1.37)	4.04 (2.39)	4.15 (1.74)	4.18 (1.56)	3.79 (1.34)	4.60 (2.21)	1.37	0.13	0.81

(+ $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ ) ( )内は標準偏差

2. 衡平性の認知および性別によって検討した恋愛スタイル、関係評価、およびデートDV被害・加害経験

まず、Adamsの公式に基づき、男女を過小利得群、衡平利得群、過大利得群の3群に分類した。その後、恋愛スタイル、関係満足度、およびデートDV被害加害経験について、衡平性(3)×性別(2)の分散分析を行った(Table 3)。その結果、恋愛スタイルについては、ManiaおよびLudusにおいて、衡平性の主効果がみられた( $F(1,323)=4.44, p < .05$ ;  $F(1,323)=3.15, p < .05$ )。下位検定(Tukey法)の結果、Maniaでは、過小利得者は過大利得者より有意に高かった。一方、Ludusにおいては、過小利得者が衡平利得者より有意に高かった。また、Agapeにおいては、性別の主効果が示され( $F(1,323)=23.26, p < .001$ )、男性は女性より有意に高いことが明らかとなった。次に、関係評価については、「関係満足感」および「関係関与性」において衡平性の主効果がみられた( $F(1,323)$

$=19.49, p < .001$ ;  $F(1,323)=3.84, p < .05$ )。衡平利得者および過大利得者は、過小利得者より関係満足度や関係関与性が高かった。さらに、デートDV被害「身体的暴力・脅迫」「精神的暴力」で性別の主効果が見られ、男性が女性より高かった( $F(1,323)=5.19, p < .05$ ;  $F(1,323)=5.42, p < .05$ )。また、デートDV加害経験では、「性的暴力・交友監視」で性別の主効果が示され( $F(1,323)=12.61, p < .001$ )、男性が女性より有意に高かった。また、DV加害経験の「性的暴力・交友監視」では、衡平性の主効果において有意傾向が示され( $F(1,323)=2.99, p < .10$ )、過小利得者は、衡平利得者および過大利得者より高い傾向にあることがわかった。なお、衡平性の認知に関わる変数、恋愛スタイル、および関係評価に関する変数の平均値等をTable 2に示した。

### 3. カップルの関係性がデートDVの被害・加害経験に及ぼす影響

衡平性に関する各変数、恋愛スタイル、およびデートDVの被害加害経験の因果関係を検討するために、Amos4プログラムを用いてパス解析を行った。各パスを検討すると、まず、男性の被害経験については、自己投入から Mania および Agape へのパス、自己成果から Agape へのパス、他者成果から「身体的暴力・

交友監視」へのパス、Mania から「身体的暴力・脅迫」および「性的暴力・交友監視」へのパス、Agape から「精神的暴力」へのパスが有意であった (Figure 2)。女性の被害経験については、自己投入から Mania および Agape へのパス、自己成果から Agape へのパス、Mania から「身体的暴力・脅迫」および「性的暴力・交友監視」へのパス、Agape から「精神的暴力」へのパスが有意となった (Figure 3)。すなわち、男女

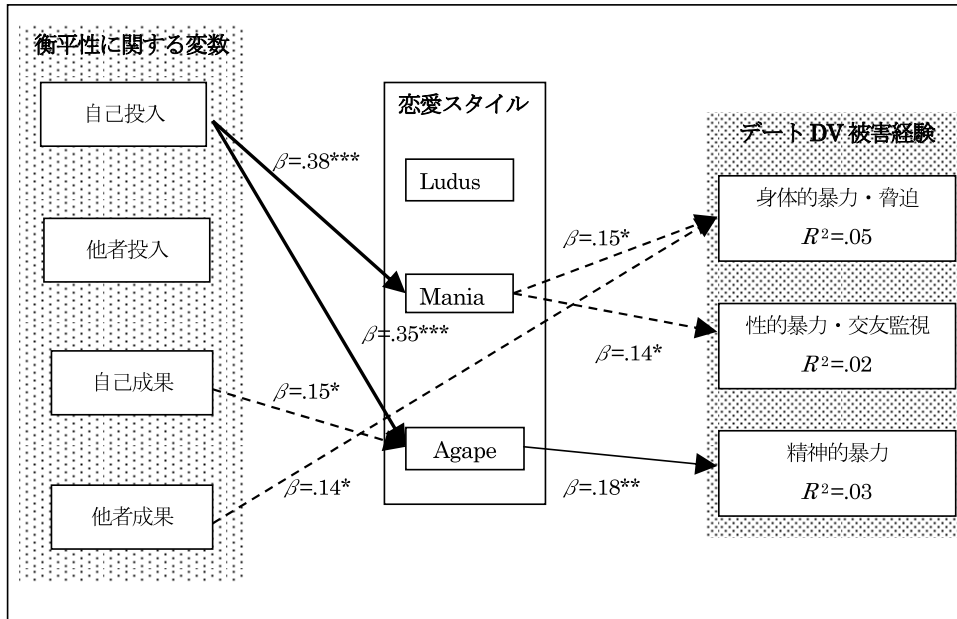


Figure 2 衡平性の認知および恋愛スタイルがデートDV被害経験に与える影響 (男性)  
(\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )

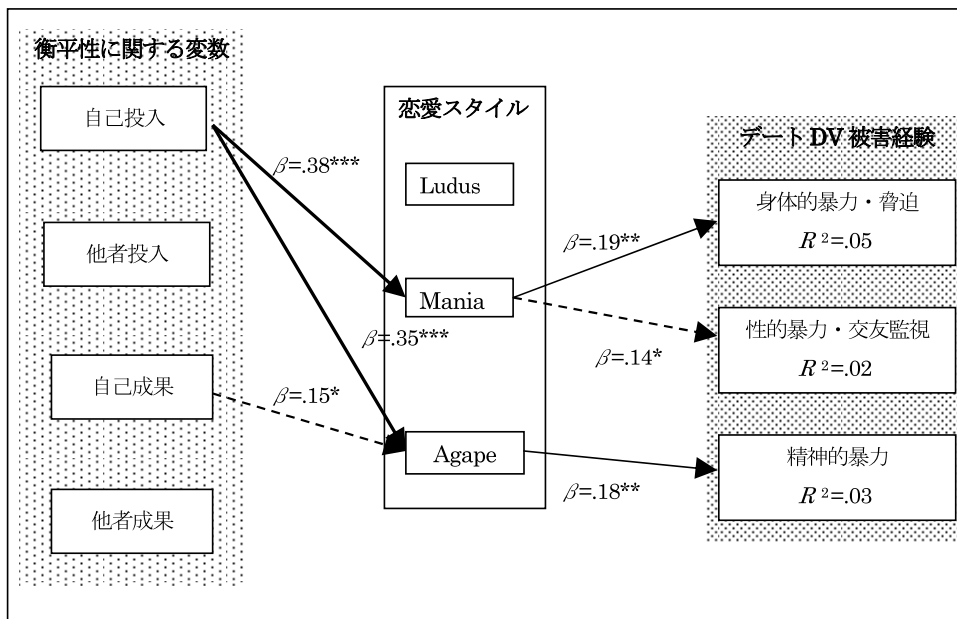


Figure 3 衡平性の認知および恋愛スタイルがデートDV被害経験に与える影響 (女性)  
(\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )

ともに、自己投入・自己成果が高まるほど、Mania・Agapeという恋愛スタイルが高まり、恋愛スタイルがデートDV被害経験を高めていることが明らかとなった。また、男性では、他者成果の高さが、直接「身体的暴力・監視」の被害経験を高めていた。

次に、加害経験については、男性では、自己投入からLudusおよびManiaへのパス、他者投入からManiaへのパス、自己投入および他者投入から「身体的暴力・

脅迫」へのパス、他者成果から「性的暴力・交友監視」へのパス、LudusおよびManiaから「精神的暴力」へのパスが有意であった (Figure 4)。一方、女性では、自己投入からManiaへのパス、他者投入から「身体的暴力・脅迫」および「精神的暴力」へのパス、他者成果から「身体的暴力・脅迫」へのパス、Maniaから「性的暴力・交友監視」および「精神的暴力」へのパスが有意であった (Figure 5)。つまり、男女ともに、

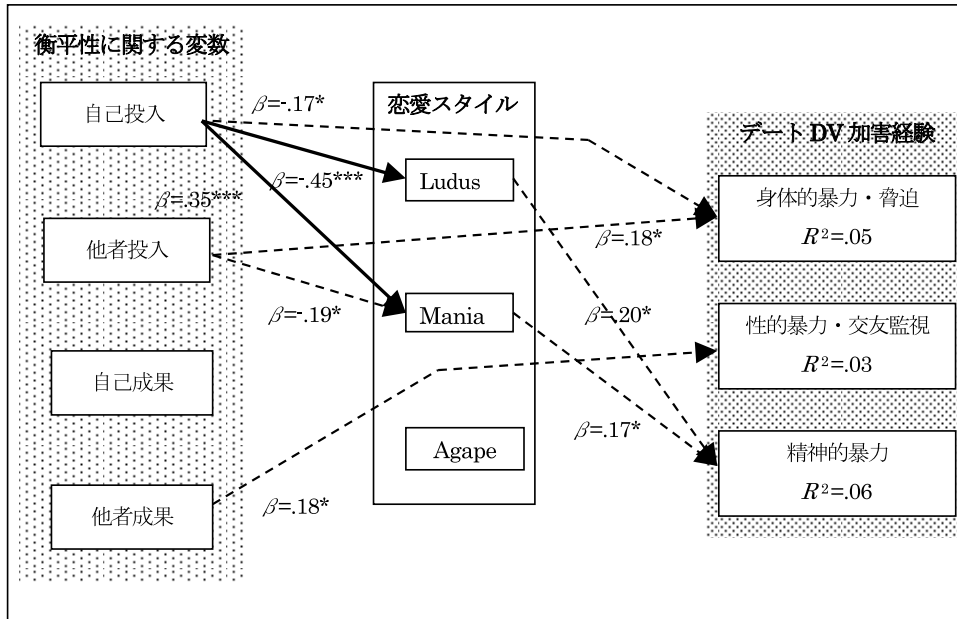


Figure 4 衡平性の認知および恋愛スタイルがデートDV加害経験に与える影響 (男性)  
(\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )

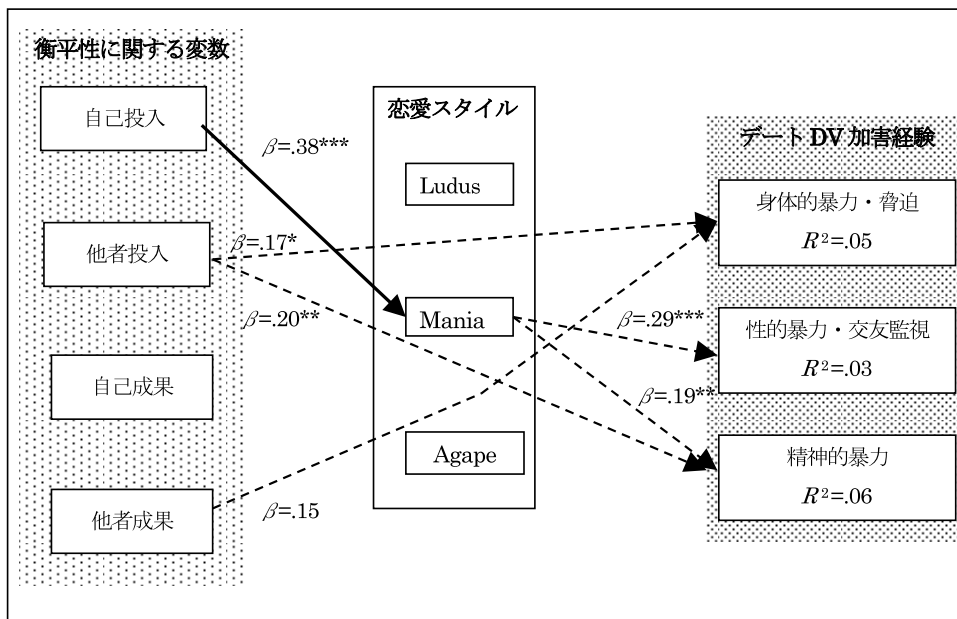


Figure 5 衡平性の認知および恋愛スタイルがデートDV加害経験に与える影響 (女性)  
(\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ )



被害経験と同様に加害経験においても、自己投入が高いほどManiaが高くなり、Maniaが高いほど加害経験が高まることがあきらかとなった。また、他者投入や他者成果の高さが、直接的に加害経験を高めているという結果も男女に共通してみられた。さらに、男性では、自他の投入の低下が、ManiaやLudusを高め、それらの恋愛スタイルが高まることにより、加害経験が高まるという結果も示された。

## IV. 考 察

### 1. デートDV被害・加害経験尺度の因子分析

本研究では、デートDV経験として、「身体的暴力・脅迫」「性的暴力・交友監視」「精神的暴力」という3側面が見いだされた。内閣府(2009)によるデートDVの実態調査においても、交際相手からの「身体的暴行」「心理的攻撃」「性的強要」が被害内容として取り上げられており、本研究の3側面もこれにほぼ合致した結果となった。しかし、本研究では、身体的暴力と脅迫行為、また、性的暴力と監視行為というように、1因子中に特徴の異なる暴力が混在している。

先行研究によると、第2因子を構成している性的暴力加害では、男性が女性より高く同じく交友監視のような非暴力的攻撃については、女性の方が男性より攻撃の頻度が高いという結果が得られている(李・塚本, 2005; 小泉・吉武, 2008)。しかし、今回の分析では、それら種類の異なる項目が同一因子に含まれてしまった。今後は、被害・加害行為において、身体的な暴力と非身体的暴力、あるいは言語的な暴力と非言語的暴力というように、暴力の種類ごとの特徴をとらえ得る尺度の検討が必要である。

### 2. 衡平性の認知および性別によって検討した恋愛スタイル、関係評価、およびデートDV被害・加害経験

まず、恋愛スタイルのAgapeについては、男性が女性より高いという結果が得られた。恋愛スタイルについての性差に関しては、松井ら(1990)において、男性はAgapeが高く、女性ではLudusとPragmaが高いという結果が得られており、本研究の結果は、この結果と一部一致している。松井(1993)は、恋愛行

動の進展と恋愛スタイルとの関連について検討し、恋愛が進んでいない段階においても、男性はAgapeやErosといった恋愛意識が高く、女性は交際が親密化するに従い、それら得点が高まると指摘している。このような特徴を、松井は「コミットメントの性差仮説」と呼び、関係のイニシアティブをとるために、交際初期には女性は戦略として、コミットメントを高めないために、ErosやAgapeを抑制していると解釈している。この仮説が意味するところは、男女が同時にコミットメントを高めた場合には、関係性における主導権は男性に握られやすいということである。この背景には、男性が主、女性が従という暗黙の構造が存在しているようだ。

次に、自分よりパートナーの方が得をしていると認知している過小利得者は、自分の方が得をしていると認知している過大利得者よりManiaが高く、衡平であると認知している衡平利得者よりLudusが高いという結果が得られた。これまでの研究でも、怒りが過小利得者の気分の特徴とされていたが(Homans, 1978; 諸井, 1989)、本研究から、過小利得者において、嫉妬、不安、抑うつのような強い感情に特徴づけられる狂気的な愛のスタイルであるManiaや、相手との距離をとりたがり、遊び半分のゲーム感覚的な愛のスタイルであるLudusが高いという特徴が示された。Maniaはパートナーへの強いコミットを示し、Ludusは出来るだけコミットを低めようとする愛のスタイルであり、相手への執着という点においては、両者は対称的な恋愛スタイルのように思われる。過小利得者では、そのようなアンビバレントな感情をパートナーに対して抱きやすいと推測される。

関係満足感や関係関与性においても、過小利得者は、衡平利得者や過大利得者より低いことが明らかになった。これまで、親密な二者関係においては、衡平利得者の満足度が高いこと、また、交換関係が若干有利な場合に最も幸福感が高いという結果も示されている(e.g., 井上, 1985; 和田・山口, 1999)。本研究においても、先行研究と同様に、親密な二者関係においては、過小利得者の満足度が低いことが改めて示された。異性交際中の否定的出来事によって生じる否定的感情について検討した立脇(2005)は、否定的感情を親

和不満感情と攻撃・拒否感情の2側面に分類している。同研究によれば、親和不満感情は「交際相手に近づきたいという親和欲求や独占欲が満たされず、相手と距離があることを意識させられる出来事」によって生じていた。一方、攻撃・拒否感情は、「自分が不利益を被る出来事」によって生じていた。2側面の否定的感情が喚起される出来事は、いずれもパートナーと自身との関係において、自身の状況に不満足や不利益を感じていた。過小利得者は、関係性の不均衡から、自身の状況に不満足感を抱きやすく、否定的感情が喚起されやすいと考えられる。

デートDV被害経験に関しては、男性は女性より、身体的暴力・脅迫や精神的暴力の被害を受けていることがわかった。Frieze (2005) による米国の調査では、穏やかな暴力や言語的な暴力を含めると、女性の方が男性より暴力を多用しているという結果が得られている。また、国内においても、身体的暴力や携帯チェックにおいて、男性より女性の加害経験が多くみられるという報告もある(李・塚本, 2005; 小泉・吉武, 2008)。これまでの我が国の全国調査では(内閣府, 2009)、交際相手からの「身体的暴行」、「心理的攻撃」、「性的強要」の経験率は、いずれも女性の被害率が高くなっているが、今後は、さらに女性から男性への暴力についても検討していく必要性が示されたといえよう。しかし、本研究の結果から、安直にデートDVにおける性差がなくなっていると判断するのは早計である。これまでのデートDVを測定する尺度は、いずれも頻度で回答するようになっている。しかし、個人差はあるとしても、男性が女性に身体的暴力を加える場合と、女性が男性に身体的暴力を加える場合に、相手に与えるダメージという点で差はないのだろうか。今後は、体力差や勢力差などによる相手に与えるダメージの差異という質的な面も併せて検討する必要がある。

デートDV加害経験では、男性が女性より、性的暴力・交友監視を行っていることが明らかとなった。今回、性的暴力・交友監視の被害経験については、性差は示されていないものの、性暴力に関しては、男性が加害・女性が被害という構図になりやすい。片瀬(2007)によると、高校生および大学生のキスの経験

率における性差は、2005年の時点でほとんど見られなくなったとのことである。しかし、性交渉をどちらがリードするかということに関しては顕著な性差がみられ、男性は女性より性交渉場面において、自身がリードしようとする者の比率が高いという結果が得られている(eg. 赤澤, 2000; 片瀬, 2007)。このような性差の背景には、昔から男女に対し、性行動におけるダブル・スタンダードが暗黙の了解とされているということがある。性行動においては、男性がイニシアティブを取り、リードするという意識が、性交渉場面での支配-被支配における性差を生み出しやすくなると推測される。そして、そのような関係性が、デートDVにおける性的暴力の被害・加害経験にも影響を及ぼしている可能性は高い。

### 3. カップルの関係性がデートDVの被害・加害経験に及ぼす影響

被害経験においては、男女に共通して、自己投入や自己成果の高さが、Mania・Agapeという恋愛意識を経由して身体的暴力・脅迫、性的暴力・交友監視、および精神的暴力の被害経験を高める要因となっている。つまり、男女ともに、自身の関係性へのコミットメントによって生じられる恋愛スタイルが、デートDVの被害経験に大きく関わっていることが明らかとなった。既にManiaについては、その得点が高いほどパートナーに対する暴力性が高いことが示唆されているが(Bookwala, Frieze, & Grote, 1994)、Maniaの高さは、被害経験とも関連していることがわかった。

男女のカップルあるいはパートナー間でDVが生じる要因の一つとして、人間関係の嗜癖行動として位置づける考え方がある(遠藤, 1998)。そのような人間関係を遠藤は「共依存」と呼んでいる。野口(2007)によれば、共依存の基本は、「他人に対するコントロールの欲求で、他人に頼られていないと不安になると、人を頼ることで、その人をコントロールしようとする人との間に成立するような依存・被依存の関係」と述べている。本研究で測定されているManiaはまさに依存であり、Agapeは被依存であるといえる。野口は、そのような共依存傾向の高い人ほど、デート時にパートナーからDVを受ける傾向が高いと指摘してお

り、本研究の結果もこれに合致している。しかし、ここで注意しなければならないのは、デートDVが、共依存と関連しているからといって、それが被害者および加害者の双方の責任であると考えてはならないということである。伊田（2010）は、DVの本質は強者が弱者を支配しているDV関係であるのに、現象面にとられて、「支配されるのが好きなのだ」というように、被害者の方にも落ち度があるというように考えてしまうことの危険性を指摘している。つまり、デートDVは関係性の問題であるが、その要因は加害者側にあるということを我々は認識しておかねばならない。

ところで、男性においては、交際相手の成果を高く認知する者ほど、身体的暴力・脅迫の被害経験も高まっていた。他者成果は、自己成果との比較により評定されていると考えられる。そうすると、他者成果の高さは、自身の不公平感を高め、加害行為を生起させる要因となりやすいように思われるが、今回の結果はこれに反する。これについては、今後カップルデータを用い、自他の成果の多寡と、被害—加害関係との関連について詳細に検討する必要がある。

一方、加害経験では、男女ともに、自己投入の高さが、Maniaを経由して加害経験を高めており、これは被害経験と同様のプロセスといえる。パートナーとの関係性への投入は、強迫的で、相手にのめりこむという恋愛スタイルを強め、それが被害・加害行為を生起させる大きな要因になっていることが明らかになった。また、他者投入の高さも、加害経験を高める一要因となっている。他者が自身に尽くしてくれていると感じる時、関係性における自己優位性が認識され、そこに明確な支配—被支配意識が生じることにより、加害行為が生起すると予測される。逆に、他者成果が高い場合にも、加害経験が高まっている。先述したように、関係性において、パートナーが報われているという認知は、自己成果との比較で評定されているものと推測される。となると、自他の成果の差を小さくしようという働きが、つまりは自身の成果をパートナーと同じほどに高める手段として、あるいはパートナーの成果を自身と同じほどに低めるための手段として、加害行為が行われている可能性がある。その場合に、男性は性的加害を行いやすく、女性の場合は身体的加害を行い

やすいといえる。上述したように、男性にとって性的暴力は、女性以上に行使しやすい暴力といえる。また、相手の注意をひくために身体的暴力を行う女性がいる（Frieze, 2008）という指摘もあるように、女性にとって身体的暴力は最もパートナーにアピールしやすい暴力といえるのかもしれない。

ところで、加害経験を高めるプロセスとして、男性では、女性と異なり、自己投入が低い場合にも加害経験が高まるという経路が示されている。つまり、男性の場合、自己投入の低さが、Ludusを経由して加害経験を高める経路と、他者投入の低さがManiaを経由して、加害経験を高めるという経路も存在する。よって、男性の場合、関係性への自他の没頭だけでなく、自他の関係性への投入が低い、いわば関係性を軽んじているという認識からも暴力が生みだされるといえる。それだけ、男性の場合、加害行為を行うことは、女性以上にハードルが低いとも考えられる。第6回青少年の性行動全国調査報告によると、「愛情が無くてもセックスすること」に対する許容度は、大学生・高校生ともに男性が女性より高い（石川, 2007）。つまり、男性では、Ludusが高い場合、すなわち真剣に交際しようという気持ちがない場合にも、性的な関係性を持ちやすいと予測され、そのような意識がDVの生起にも影響している可能性がある。

本研究の結果から、自他の投入と成果のアンバランスさや、Mania・Agape・Ludusという恋愛スタイルがデートDVを生起させる要因となっていることが明らかとなった。特に自己投入とManiaは、DV被害加害経験を生起させる大きな要因となっていた。遠藤（1998）によれば、人間関係の嗜癖の一つとして、1人でいることができずに、常に誰かと愛情関係にあり続けようとする「愛情嗜癖」があるとしている。自分が誰かを愛している、または愛されていると思える状態や感覚によってのみ自分の存在を確信できるという報酬効果で嗜癖していくとのことである。これまで、親密な二者関係の関係満足度や関係関与性というポジティブな関係評価の規定因として、成果の影響が指摘されていた（和田・山口, 1999）。しかし、デートDVというネガティブな関係性については、投入の方が予測因として大きな影響力を持つことが示唆され

た。つまり、デートDV被害加害者においては、遠藤が指摘しているように、自身の投入が報酬効果として認知され、より相手との関係性に没頭していくという歪みが生じているものと予測される。

以上のように、これまで、DVの生起要因として自尊心の低さなど個人要因が指摘されることが多かったが、関係性のアンバランスさや、そこから生じる相手への恋愛感情が、デートDVの被害加害行為を生じさせる要因となっていることが本研究より明らかとなった。しかし、因果関係における決定係数はいずれも低いことから、自他の投入と成果、および恋愛スタイルのみでデートDVの生起メカニズムが完全に説明されるわけではないことも同時に明らかとなった。投入や成果、および恋愛スタイルにおいて、交際の進展度による差異や、カップル間で投入や成果にずれがあることなどが指摘されている。今後は、関係進展度やカップル単位の検討も視野に入れる必要がある。さらに、暴力における性差を詳細に検討するためには、暴力の頻度だけでなく、その質的側面も同時に測定できるような尺度の開発が急務である。

## 引用文献

- Adams, J.S. (1965). Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, 2, 267-299.
- 赤澤淳子. (2006). 夫婦関係における衡平モデルの検討—関係満足度および個人の充実感におけるカップル間の比較 人間学研究, 5, 35-46.
- 赤澤淳子. (2000). 性別役割行動の再生産システムとしての性別役割規範 今治明德短期大学研究紀要, 24, 39-53.
- 青野篤子・周玉慧・森永康子・葛西真記子. (印刷中). 親密な関係における葛藤解決方略の使用に及ぼす両面価値的性差別主義の影響—日本と台湾の大学生の比較 黄自進(編) 日本の伝統と現代 (台湾・中央研究院)
- Bookwala, J., Frieze, I.H., & Grote, N. (1994). Love, aggression and satisfaction in dating relationships. *Journal of Social and Personal Relationship*, 11, 625-632.
- Davidson, B. (1984). A test of equity theory for marital adjustment. *Social Psychology Quarterly*, 47, 36-42.
- 遠藤優子. (1998). 嗜癪と嗜癪からの回復 副田あけみ・遠藤優子編著 嗜癪問題と家族関係問題への専門的援助 ミネルヴァ書房 23-35.
- Frieze, I.H. (2005). *Hurting the one you love: Violence in relationships*. Belmont, CA: Thomson Wadsworth.
- Frieze, I.H. (2008). Social policy, feminism, and research on violence in close relationships. *Journal of Social Issues*, 64, 665-684.
- 藤田絵理子・米澤好史. (2009). デートDVに影響を及ぼす諸要因の分析とDV被害認識の明確化による支援の試み 和歌山大学教育実践総合センター, 19, 9-18.
- Hatfield, E., Greenberger, D., Traupmann, J., & Lambert, P. (1982). Equity and sexual satisfaction in recently married couples. *Journal of Sex Research*, 18, 18-32.
- Hines, D.A., & Saudino, K.J. (2003). Gender differences in psychological, physical, and sexual aggression among college students using the Revised Conflict Tactics Scales *Violence and Victims*, 18, 197-217.
- Homans, G.C. (1961). *Social behavior : Its elementary forms*. Harcourt Brace Jovanovich, Inc., New York. (ジョージ・C・ホームズ 橋本茂訳 (1978). 社会行動 誠信書房)
- 伊田広幸. (2010). デートDVと恋愛 大月書店
- 井村弘子. (2006). ドメスティック・バイオレンス被害女性のロールシャッハ反応 沖縄大学人文学部紀要, 9, 43-53.
- 井上和子. (1985). 恋愛関係におけるEquity理論の検証 実験社会心理学研究, 24, 127-134.
- 石川由香里. (2007). 青少年の生活環境と性行動の変容 財団法人日本性教育協会 「若者の性」白書 小学館 82-100.
- 岩間暁子. (1997). 性別役割分業と女性の家事分担不公平感 家族社会学研究, 9, 67-76.
- 片瀬一男. (2007). 青少年の生活環境と性行動の変容 財団法人日本性教育協会 「若者の性」白書 小学館 24-48.
- 小泉奈央・吉武久美子. (2008). 青年期男女におけるデートDVに関する認識についての調査 純心現代福祉研究, 12, 61-75.
- 李環媛・塚本宣子. (2005). デイティングDVに関する研究—大学生の実態調査に基づいて 宮崎大学教育文化学部紀要, 13, 1-18.
- Lee, J.A. (1977). A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173-182.
- 松井豊. (1993). 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64, 335-342.
- 松井豊. (1997). 恋ごろの科学 サイエンス社
- 松井豊・木賊知・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美. (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立川短期大学紀要, 23, 13-23.

- 諸井克英. (1989). 対人関係への衡平理論の適応—予備的調査 人文論集 (静岡大学人文科学社会科学・人文科学研究報告), **37**, 15-40.
- 諸井克英. (1990). 夫婦における衡平性の認知と性役割感 家族心理学研究, **4**, 109-120.
- 諸井克英. (1994). 子育てにおける衡平性の認知 家族心理学研究, **8**, 39-51.
- 諸井克英. (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚, 家族心理学研究, **10**, 15-30.
- 内閣府. (2009). 男女間における暴力に関する調査<概要版> (<http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/images/pdf/chousagaiyou2103.pdf#search='内閣府 男女間における暴力'>) (2011年10月30日)
- 中村雅彦. (1990). 大学生の友人関係の発展に関する研究—関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討 社会心理学研究, **5**, 29-41.
- 中村雅彦. (1991). 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, **31**, 132-146.
- 野口康彦. (2009). 大学生カップル間におけるデートDVと共依存に関する一検討 山梨英和大学紀要, **8**, 105-113.
- 野坂祐子. (2010). デートDVの被害・加害への介入支援 臨床精神医学, **39**, 281-286.
- 奥田秀宇. (1997). 恋愛関係における社会的交換過程—公平, 投資, および互惠モデルの検討 実験社会心理学研究, **34**, 82-91.
- Schafer, R.B., & Keith, P.M. (1980). Equity in marital roles across the family life cycle. *Journal of Marriage and the Family*, **43**, 359-367.
- Sugarman, D. B. & Hotaling, G.T. (1989). Dating Violence: Prevalence, context, and risk marker. In M.A. PirogGood & J.E.Stets (eds.), *Violence in dating relationships : Emerging social issues*, New York: Praeger Publishers, 3-32.
- 富安俊子・鈴井江三子. (2008). ドメスティック・バイオレンスとデートDVの相違および支援体制の課題 川崎医療福祉学会誌, **18**, 65-74.
- 土田陽子. (2007). 青少年の性的被害と恋人からのDV被害の現状と特徴 財団法人日本性教育協会 「若者の性」白書 小学館 122-144.
- 立脇洋介. (2005). 異性交際中の出来事によって生じる否定的感情 社会心理学研究, **21**, 21-31.
- Traupmann, J., Petersen, R., Utne, M., & Hatfield, E. (1981). Measuring equity in intimate relations. *Applied Psychological Measurement*, **5**, 467-480.
- 和田実・山口雅敏. (1999). 恋愛関係における社会的交換

モデルの比較：カップル単位の分析 社会心理学研究, **15**, 125-136.

Walster, E., Walster, G.W., & Traupmann, J. (1978). Equity and premarital sex. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 82-92.

## 付 記

本研究は、平成22年度仁愛大学共同研究費助成をうけて行われた。

